

授業力向上をめざした学校経営の実践：  
「伝える・つなぐ・積み上げる」をキーワードに

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 民子, Ito, Tamiko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/1091">https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/1091</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 授業力向上をめざした学校経営の実践

「伝える・つなぐ・積み上げる」をキーワードに

伊藤 民子

Tamiko Ito

## はじめに

平成29年3月に告示された新学習指導要領では、子どもたちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成し、その際、子どもたちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」を重視すること等が求められている。今まさに学校は、時代とともに変化する社会情勢を踏まえて、新しい教育への転換を迫られている。

校長として学校経営に携わるためには、豊かな教育実践の経験に基づくリーダーシップ等が求められるが、時代の変遷とともに子どもたちの実態をしっかりと把握し、地域社会に根ざした学校経営のグランドデザインを描くことが必要不可欠な要素である。

本研究は、すべて筆者が校長として勤務した学校での実践研究報告であり、教員の意識改革や研修、授業実践を積み上げることによって、子どもたちの学びが受け身の姿勢から自ら学ぶ姿勢への転換を図ることをねらいとしたものである。

## 1 研究の目的と方法

### 1-1 研究テーマ

授業力向上をめざした学校経営の実践

～ 「伝える・つなぐ・積み上げる」をキーワードに ～

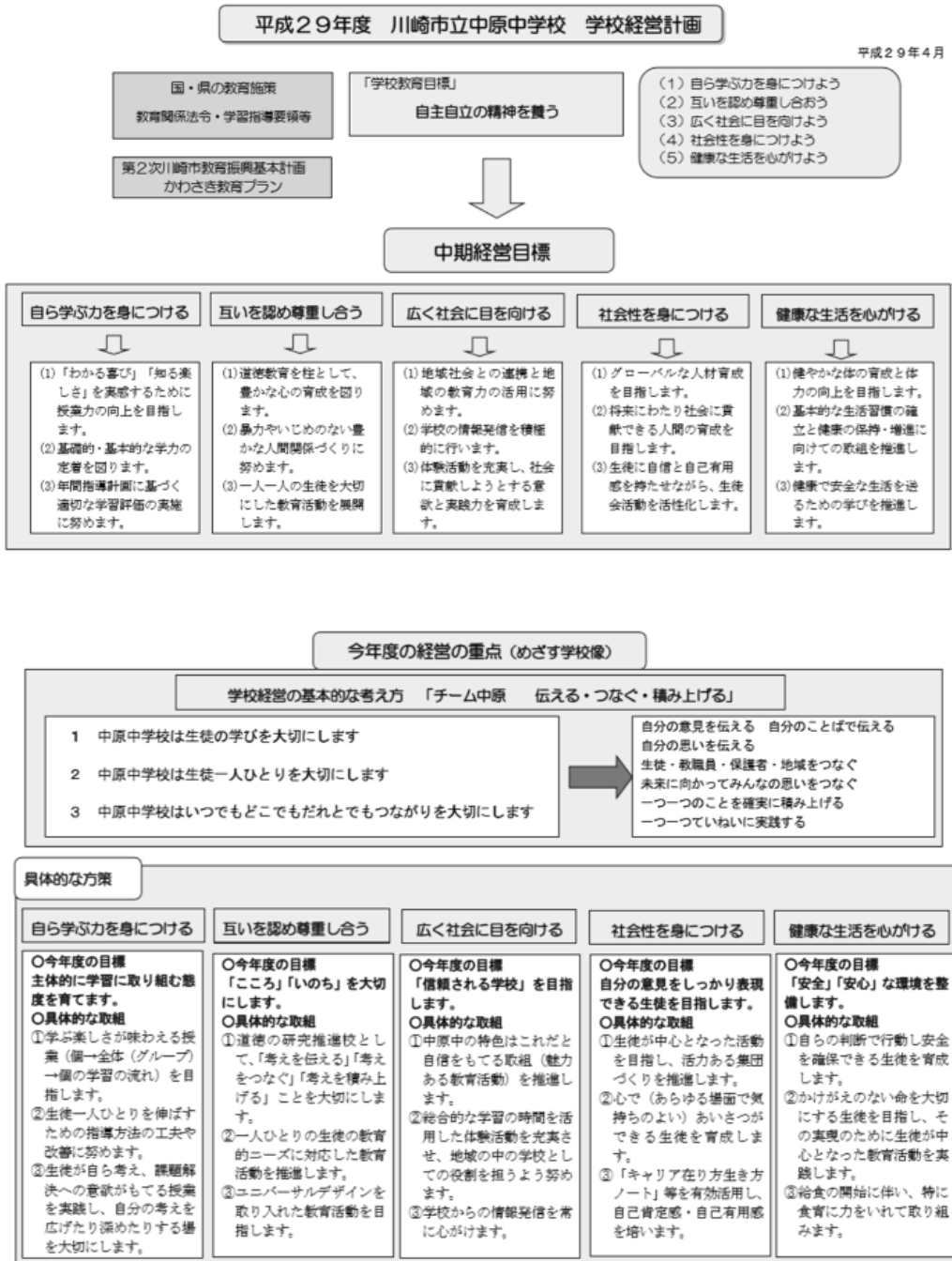
### 1-2 研究の概要

本研究は、授業力向上を学校経営の柱として取り組み、学校は子どもたちが生き生きと学ぶ場であることを広い意味での学びという概念でとらえ、「伝える」「つなぐ」「積み上げる」の3つのキーワードから、音楽科を中心とした各教科や道徳についての実践研究報告である。これらは実践報告としての研究の位置づけであるが、それぞれの実践について授業力向上という視点から検証しまとめたものである。

(1) 学校経営計画と3つのキーワードについて

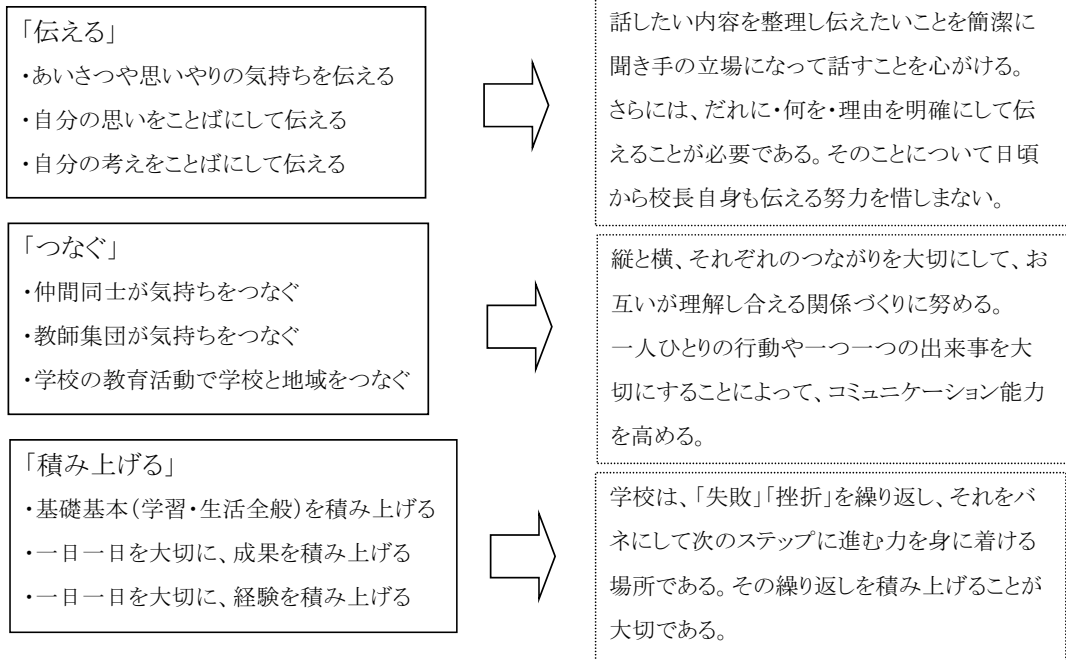
次の表は、平成29年度の川崎市立中原中学校学校経営計画であるが、教職員をはじめ生徒、保護者そして地域の方々に校長の学校経営ビジョンをわかりやすく示したものである。学校経営計画の中で特に大切にしていることは、「伝える」「つなぐ」「積み上げる」の3つのキーワードであるが、それについては次の③で詳細を述べることとする。

①平成29年度学校経営計画(中期経営計画と今年度の経営の重点)



## ② 3つのキーワードについて

次は、日常生活や学校行事等の際に教職員をはじめ生徒、保護者そして地域の方々と思いをひとつに取り組めるよう学校経営の基本的な考え方を簡潔に分かりやすく示したものである。



## 2 研究の内容

### 2-1 研究の実際

#### 1 わかる授業づくりのための「授業力向上」に関する研究

～ 聴く力・コミュニケーション能力の育成と教育環境の整備を重点に ～

(川崎市立白鳥中学校 平成22・23年度)

教職員一人ひとりの意欲や指導技術を結集することにより、教職員集団が自信をもって学校全体で生徒の成長に関わり、学校が変わることを実感したいという思いで研究を始めた。当初は、指導が困難な生徒がいるなど自分たちの日頃の教育活動を守ることが精一杯の状況であったが、研究を進めるうちに落ち着いた教育活動が展開できるようになり、研究の方向性が授業規律など教育環境の整備から授業力の向上そのものへと変わっていくことを実感した。

##### (1) しらとりスタンダードの取組とその成果

研究の最初に、わかりやすい授業、学び合う授業のために必要な取組として、授業規律の見直しや授業環境整備、さらに学び合う環境づくりのための清掃のルールや掲示物づくり等に取り組んだ。ここでは、授業のルールと清掃のルールについて述べる。

①授業のルール

- 1 授業担当教師は、チャイムがなるまでに授業の教室にいるよう心掛ける。
- 2 授業初めのあいさつは次のようにする。(号令の徹底、大きな声であいさつ、黙想等々)
- 3 はじめに出欠をとる。(授業の最初に全員の生徒がそろっているかを確認)
- 4 授業準備の確認をする。(個々の授業準備、教室環境(黒板・机の整頓等々)、姿勢)
- 5 集中力を高めるような授業展開の工夫(ねらいの明確化、今やる活動を明確に示す、グループ活動等々)

前述の1~5については、生徒向けにもプリントを作成して配付したり、教室掲示をしたりする等、常に確認できるようにした。また、教員が繰り返し声掛けをし粘り強く指導することで習慣化することをねらいとした。

②清掃のルール

- 1 一人ひとりが汚さない、散らかさないようにする。
  - ・ ゴミは必ずゴミ箱に捨てる。
  - ・ 自分の机、自分のロッカー以外に私物を置かない。(ロッカーの上にも物を置かない)
  - ・ 黒板や机などに落書きをしない。
- 2 毎日の清掃をしっかり行い、汚れたらすぐきれいにする。
- 3 汚したくないと思う教室にする。
  - ・ 掲示物を充実させきれいな教室にする。
  - ・ 写真や賞状など、クラスの歴史や大事なものを飾り、大切な教室をきれいに使いたいと思えるようにする。

上記の1~3については、イラスト入りのマニュアルや掲示物等を作成し教室に掲示した。特に学年の初めには、学級で確認する時間を設定し全学年で足並みをそろえた指導を行った。

③成果と考察

授業を始める前に、生徒が顔だけではなく身体を前に向ける姿勢ができるまでは話を始めないことを全教員が徹底して行った。そのことは、生徒が話を聞く姿勢をつくることにつながったり、あいさつのルールを徹底することによって授業に入りやすくなったりと、授業規律の徹底は、目に見える大きな成果となって表れた。

また、清掃のルールを徹底することは、生徒はきれいな教室で授業することの心地よさを感じ、自ら進んでゴミを拾ったり、黒板をきれいにしたりするようになった。授業以前の準備が大切であり意識が高まることによって学校が変わってきたと感じた。

次は、研究を始めた当初と研究後を比較したアンケート結果の抜粋である。教師は、日頃生徒と接する中で感じていた変化を実感していたが、そのことが数字でも裏付けられる結果となった。

Q1 授業の始めと終わりに「礼」をしますが、そのことについてあなたはどのように思いますか？

質問 項目	1 年生		2 年生		3 年生	
	研究前	研究後	研究前	研究後	研究前	研究後
授業を受ける者としてきちんと挨拶するのは当然だ	50%	60%	37%	70%	30%	60%
習慣だから特に意識せずに行っている	40%	35%	51%	25%	40%	30%
いつもなんとなく挨拶している	10%	5%	11%	5%	30%	10%

Q2 いろんな掲示物がある学級と必要最低限の掲示物がある学級ではどちらが良いですか？

質問 項目	1 年生		2 年生		3 年生	
	研究前	研究後	研究前	研究後	研究前	研究後
いろいろな掲示物がある学級	72%	80%	56%	85%	38%	70%
必要最低限の掲示物がある学級	3%	10%	17%	10%	21%	20%
どちらでも良い	25%	10%	27%	5%	41%	10%

## (2) 「わかる授業」づくりとユニバーサルデザインの実践

授業のユニバーサルデザインとは、A さんには「ないと困る支援」であり、それはどの生徒にも「あると便利な」支援である。さまざまな生徒の学習レベルに対応するためには、ユニバーサルデザインの考え方が必要で、それは特定の支援が必要な生徒だけではなく、多くの生徒たちへの支援であるという前提をしっかりとつことが大切である。授業のユニバーサルデザインを実践する際の留意点として次の2点を示した。

- ① クラス全体の生徒の行動に着目し、授業参加の仕方や学習の仕方に問題のある生徒に対して、その問題にかかわる行動を改善する。
- ② さまざまなタイプの生徒に対して「多様な選択肢」を用意して、生徒の実態に合わせた指導を柔軟に行う。
  - ・ 多様な難易度や段階のある教材や課題の準備
  - ・ 多様な授業形態や生活指導形態の工夫
  - ・ 多様な「目標・めあて」「評価の観点」の導入

## (3) ユニバーサルデザインの学級づくり・授業づくりのポイント

教師はユニバーサルデザインと意識せずに指導しているが、研究を進める中で実は授業のユニバーサルデザインにつながっていることを発見した。その指導を学級集団づくりや教室・環境づくり、授業づくりの3点にまとめて示しておく。

### ① 学級集団づくり

- 落ち着いて過ごせるようにする
  - ・ 良い姿勢を意識させることにより人の話を聞く力や学習に集中する力の身体的基礎を養う。
  - ・ 肯定的・プラスの言い方やていねいなことばづかいから、安心感や主体性が生まれる。
- 間違いやわからないことを肯定的に受け止めさせる。
- 学び方の違いを認め合える。

②教室・環境づくり

- 黒板の周辺がすっきりとしていて、余分な刺激や情報がない。
- 学習環境を整備し、何をどこに片づけるか、何を準備するかが分かるように示す。

③授業づくり

- 授業で学ぶ内容や学習手順を示すことにより見通しをもって学習できる。
- 指示や説明を具体的に短い言葉で示す。
- 授業の内容が目で見えてわかるように示す。
- 基礎学習と発展学習を明確に示す。
- 個の特性に合わせた配慮がある。

(4) 英単語プリントの工夫とその実践

次に英語科の取組として、英単語が覚えられない・書けない生徒の苦手・困難さに対するユニバーサルデザインの実践例を示した。

- ①スペルを見てなかなか単語が読めない。
- ②スペルと読み方が結び付けられない。
- ③書字が遅い、あるいは早い雑。



「読み方」が記入してあるプリントを使用することで、目からの情報として「読み」が入り、苦手・困難さが減少する。

①一斉指導で使用

第1学年英語科で、夏休みの課題（未学習の単語が含まれている）として次のように「読み方」を入れたプリントを配付（英単語100語）し夏休み明けに単語テストを実施した。正しい発音が覚えられないので、あまり使いたくなかったが音としてはよく頭に入ると実感した。使う場面によっては有効だと考えられ、また「読み方」が入っているので、未学習の単語でも無理なく覚えられる生徒が多くなることもわかった。

1 「読み方」を入れて示したもの。  
「読み方」の表記は、できるだけ正しい発音になるように配慮した。

2 「読み方」の部分を折り込めば、通常のプリントになる。

	スペル	読み方	意味
01	come	カム	来る
02	walk	ウォーク	歩く
03	open	オープン	開く
04	close	クロウズ	閉める

	スペル	意味
01	come	来る
02	walk	歩く
03	open	開く
04	close	閉める

②個別指導（特別支援教育コーディネーターが担当）での使用

「単語が覚えられない・書けない」と申し出があった生徒（アルファベットも書けない生徒もあり）には、1のプリントを3のように作り変えて、夏休み中に指導した。家庭での支援もあり、スモールステップで反復練習ができたので、夏休み前の段階では3割程度しか正答できなかったが、夏休み後のテストでは7割程度正答することができた。特別支援教育コーディネーターは、この学習方法により自分で学習できるようにするためには継続指導が必要であるため、本人が負担に思わない程度に声掛けをした。

3 スペルと読み方の結びつきがよりわかるプリントを次のように示した。

	スペル	読み方
01	co   me	カム
02	wa   lk	ウォーク
03	o   pe   n	オープン
04	c   lo s   e	クロウズ

### (5) 研究の成果と考察

研究を始めた当初は、生徒指導に足並みが揃わなかったり、授業が分からない生徒がいても、そのままにして次に進んだりすることも見られたが、全教職員で同じベクトルをもちながら進むことにより、生徒が確実に変わることを実感した。それは、指導が困難な生徒に対して日々苦勞している教員集団にとっては大きな成果であり、大きな力を得たように感じた。

### (6) 研究のまとめ

本研究は、当初は授業規律を整えること、教室環境を整備することを主眼として進められたが、教員の意識が変化することによりたくさんの副産物を得ることができた。授業のユニバーサルデザインを意識することにより、生徒のさまざまな学習レベルに対応した授業づくりにつながった。それはどの生徒にもあると便利な支援として定着しつつある。また、「聴き合う」「伝え合う」活動を重視して、「学び合う」教室へ変わろうと努力する教員が、授業研究会を通して教師の学び合いの場が増えたことも大きな成果である。授業研究会は、「いつでも、どこでも、だれでも」普段から授業を参観し合い、授業や生徒について語り合う教員の関係づくりの場となり、全員が意見を出し合えるよう、付箋紙を用いた話し合いの手法がスタンダードとなったことは、この研究の大きな成果であり、学校全体が良い方向に進んでいくきっかけとなった。

校長のリーダーシップはもちろん必要であるが、一人ひとりの教員がどういう授業にしたいかというビジョンをもちそれを共有することにより、さらに生徒の理解力向上とつながったと実感した。

## 2-2 音楽科の研究について

音楽科の研究について2つの研究をここに提示する。1例目は、川崎市立白鳥中学校で表現活動を中心として豊かに表現するために必要な技能を手がかりに表現の工夫に迫る研究、2例目は、川崎市立中原中学校でコミュニケーション活動を大きな柱として創作や鑑賞の領域からアプローチしたものである。

七

<1 例目 >

聴きあい 響きあい それから音楽 ～ 豊かな表現力を高めるために ～

(川崎市立白鳥中学校 平成24・25年度)



## (1) 研究の視点

### ①ねらいを明確にした学び

授業の最初に、生徒に今日の学習のねらいや学習の流れを説明することは当たり前のことだが、黒板に掲示したり口頭で説明したりするだけではなかなか伝わらないと感じ、授業中に何回も確認する場面をもつことを意識した。ねらいを意識しながら授業を行うことは、教師も生徒にとっても大切であり、そのことによって生徒にゴールを分かりやすく示すことができると考えた。

### ②共通事項をよりどころとした学び

生徒が、「歌詞の表す情景の美しさと、その心情を聴いている人に伝えるには、もっと全体の速度をゆっくりしたほうがいいと思う。だけど、そうすると何ヶ所か息が続かないところがある。」と発言した時、共通事項はどこに出てくるのだろうかと思う。しかし、この発言をよく考えてみると音楽の用語や記号の意味、それらがもたらす効果、自分自身の思いや意図、表現するための技能習得の必要性を示唆していることがわかる。音楽を形づくっている要素を感受する能力は、共通事項を手がかりにすることで学びが深まり、音色はどうか、リズムはどうか、速度はどうかということを、知覚し感受することによって音楽との接点が生まれるものである。

### ③自然な発声と美しい響き

発声練習を効果的で意味あるものにするために、生徒にその意義や方法をきちんと理解させ、体で感じさせたり手を使ったりしながら行った。さらに音楽表現の技能を伸ばすためには、通常発声練習やパターン化した発声練習に加え、ねらいに応じた発声練習を取り入れた。ねらいに応じた発声練習とは、「息の支えがなくなってしまう」という場面ではプレスコントロールを中心とした発声、「高音域の音が下がってしまう」という場面では息を支えることや遠くへ声を届けよう等、具体的な場面でのトレーニングを取り入れることにより効果的な学習となった。また、一人ひとりを大切にしたい指導も、発声や表現の技能を高めるためには必要不可欠であり、その場면을授業の中で自然な形で取り入れるように工夫した。

### ④感じ方や表現の工夫を伝え合い高め合う

楽曲の表現を工夫していく場面では、生徒の思いや意図を言葉で引き出した後、どうしたら表現が高まるのかを技能的な視点から生徒に考えさせ、実践することによって達成感、成就感を味わわせることにつながった。そのことによって、これまでは漠然と一つ一つの要素について吟味されないまま、なんとなく良い曲、美しい曲というように受け止めていたものを、「旋律が美しい」「強弱の効果がよく出ている」というように感じ取り理解できるようになった。さらに、授業中自分の思いを音や言語で友だちに伝えることは、表現の幅を広げることにつながった

## (2) 研究の実践

教師が客観的に自分の授業を振り返ることが、授業力の向上につながると考え、授業研究記録を録画だけでなく、記録用紙に教師の声掛けや生徒の発言等を記入して振り返ることにした。録画したものと併用しながら見直すことにより、授業改善に大きな成果をあげることができた。次の記録はその一部分を抜粋したものである。

活動項目	教師の声かけ	指導のねらい
	ここまでの間に、「発声練習」「ねらいの確認」「パート練習」を行いました。	
合わせの後	<p>「ハイ、私を見てね」</p> <p>「今日はこの③の部分を3組らしくステキに歌うにはどうしたら良いでしょう。表現の工夫をどうしたらよいか？そこをみんなで考えながら、この授業の終わりには今歌ったよりステキにしたいと思います。」</p>	<p>今日はBの部分を3組らしくよりステキに歌うにはどうしたらいいか考えますと投げかけたことで、生徒は「よし！今日はこういうことをするんだ」とねらいをしっかり確認することができました。</p>
	省 略	
全員で	<p>「大事なこと言うのを忘れてた…」</p> <p>「前回やった④、④'の雰囲気⑤につなげるように歌いたいね。」</p> <p>「この間みんな④'の⑤への架け橋の部分の歌い方を工夫して、バスパートの意見を採用したじゃない (♪工夫した通りに歌ってみる) 「え、違う？」「反対？」「え、そうだった？」 (♪違う表現で歌ってみる)</p>	<p>教師がフレーズのつながりや曲の流れについて触れることにより、生徒がどう歌いたいかわかり、思いを引き出そうとしています。</p>
全員	<p>先生 B:「やってみますか」「④から。アルトパートからいくよ」</p> <p>先生 A:「歌ってみて」「つくった通りに歌ってみて」 (♪歌う)</p> <p>「こんなんだっけ？」</p> <p>「アルトもう一度やってみよう。アルトさんもう少し強く、支えをしっかりと！」「間奏に続くように」</p> <p>「ハイ、じゃあ、座って」</p> <p>先生 A:「今のこのいい感じに繋げるにはアルトはどう歌ったらいいと思う？」「さっき、顔が暗いとか言ってたけど『あせをぬぐって～』の部分が『忘れてかけていた日々～』雰囲気をおささないように続くには、アルトはどう表現したらいい？」</p>	<p>ここで生徒は改めて前回の学習を振り返り、表現について考えています。主体的に自分たちの表現について考えようとしている場面です。</p> <p>ここで技能に関する声かけをすることで、生徒は支えを意識するようになりました。</p> <p>「雰囲気をおささないように続くには？」という声かけに対して、生徒は「ここまで、強く出さず、もっと柔らかく」そしてさらに「柔らかいって、どんな感じ？」と学習が発展していきます。</p>

### (3) 研究のまとめ

校長として着任したときに、合唱コンクールのクラスの演奏や白鳥合唱団（昼休みに活動している有志による合唱団で創立以来続けて活動している）の演奏は素晴らしいが、学年や全校で歌い合わせる場面になると力を発揮できない生徒たちの様子に歯がゆい思いをしていた。そのことを良い方向に導くために、音楽科の授業だけではできないことも多いが、日々の授業の中で教師と生徒とのかかわりを変えていくことで、必ず生徒たちの歌声は変わっていくと信じ研究を推進した。

日々の授業の中で、①毎時間の授業の充実 ②一人ひとりの生徒に向き合う ③リーダーの養成が不可欠であるということを経験し、研究に正解はなくコツコツと一つ一つの階段を上ることがその方法

であると全教職員で確認し、積み上げることが大切であると考えた。研究が進んでいくうちに生徒の歌唱に対する姿勢が前向きになり、生徒たちの歌声が明らかに変化してきたことを全校合唱の演奏時などに感じることができるようになってきた頃から、教師が指導を工夫し生徒一人ひとりに向き合うことによる成果が得られてきたと実感した。それは、音楽科だけではなく他教科の授業への取り組みの様子からもみられるようになった。

研究の柱に音楽表現の技能を高めることを掲げ、表現力の向上をめざすことはなかなか容易ではないことであった。しかし、音楽科は幸いにもティームティーチング態勢で授業を行い1時間の授業の中でいねいにかかわることで、少しずつ成果を上げることができたと感じている。この研究は、音楽科が中心として行った研究ではあるが、生徒の変化を目の当たりにすると他教科の教員はあきらかに刺激を受けて相乗効果が見られたことは、生徒が学ぼうとする意欲の向上につながり学校全体として取り組んだ研究の成果でもあった。

## <2 例目 >

### 思いを音にのせて豊かに感じ表現する生徒

#### ～音楽のよさに気づき、音によるコミュニケーション活動をとおして～

(川崎市立中原中学校 平成26・27年度)

## (1) 研究の視点と具体的な取組 (音楽科)

音楽科で目指す生徒の姿を具体的に示すことによって学校全体で研究の方向性を確認した。次の①～③はその具体的な取組を示したものである。

### ①音楽のよさに気付く感性の育成

本校の学区(川崎市中原区小杉・宮内地区、丸子地区)は、小杉神社と日枝神社を中心とした夏祭りや秋祭りなどの神社の祭礼が盛んで、地元の活動や地域の行事に参加している生徒も多い。地元で和太鼓の演奏活動をしている団体やお囃子保存会もあり、生徒は日頃から和楽器の音色が馴染みのある音として体に馴染んでいる。そこで、それぞれの学年で我が国の伝統音楽に愛着をもたせるために授業を構築した。

1年次では、箏の創作活動「都節音階で反復、変化、対照を用いた創作活動」を行い、都節音階と他の五音音階(律音階)の違いを知ることによって音階をより意識した創作活動を行った。また、箏はイメージしたことを音で表現することができたり記譜が容易に行えたりすることも生徒の創作活動の幅を広げる手だてとなった。

2年次では篠笛に取り組んだ。篠笛は、お囃子などで聴いている馴染みのある音色であり、西洋の楽器と異なり発音時にタンギング(舌つき)奏法を用いないこと等気づく学習から始めた。我が国の伝統音楽には唱歌(しょうが)によって師匠からの伝承で受け継がれていることを知り、創作活動の場面では、試行錯誤しながら唱歌を用いて自分のイメージを表現しようとする場面もみられた。また、1年次での既習事項を生かし反復、変化、対照を生かして創作をしている生徒も多く見られた。3年次では、1・2年生の学習を生かすことによって3年間を系統立てた我が国の伝統音楽に対する学びを深めることが

できたと考えている。

## ② 思いや意図をもった表現の工夫

生徒たちは箏や篠笛の創作活動を通して、音楽的な知識理解を音楽表現につなげ少しずつ音楽のよさに気付くことができるようになった。このことは、他の領域の学習の場面でも具体的な姿として見られた。

歌唱表現では、技能が伴わず自分たちで思い通りの表現をすることが困難な場面が見られた。その際は生徒が言おうとしていることを教師が手本となって歌ってみせたり、ピアノを用いて表現したりするなど、あくまでも音から離れた言語活動にならないように努めた。今後は、その思いを表現につなげる技能の伸長に努め、生徒自らが音を介して確認することができるようになることが課題であると認識した。

器楽・創作の領域においては、生徒が自分の思いや意図を明確にし、それを音楽の表現にどのように組み込んでいくかという思考の活動に重点を置き、それを言葉で表現して、音に変換していくという活動を通して、思考と言葉との関わりをもたせることにより、自分の思いを歌唱の領域より容易に表現につなげることができていた。生徒たちは箏や篠笛の音を鳴らして試行錯誤しながら創作に取り組み、そこに込めた思いなどを音と共に相手に伝えるなどして、この領域の学習は生徒たちの思いや意図を表現に結び付ける手段として有効であった。

鑑賞の領域では、気付いたことを目で見てわかるように身体表現を用い、音について感じたことを擬音語やオノマトペなどを使って表現する取組を続けてきた。1年次で行った箏の創作「都節音階で反復、変化、対照を用いた創作活動」が既習事項となり、2年次に交響曲第5番ハ短調の鑑賞の授業で動機について学んだ時、創作の学習で学んだ反復、変化、対照が、動機の変化を感じ取ることと重なり合って、ベートーヴェンの作品をより身近に感じながら授業を行うことができた。それは、教師が意図をもって指導してきた成果として、生徒が応用していく力がついてきたのではないかと考えられる。

このように、生徒が音楽的な要素を知覚することによって自らの思いや意図を明確にすることが、どの領域の学習においても有効であり、生徒の思考の幅が広がることを実感した。

## ③ 音を媒介として思いを共有し音楽を楽しむ姿

ペア学習や少人数グループといった生徒同士、全体の中での教師と生徒による学び、ねらいにせまるための共有の場を様々な領域の中で設定した。教師と生徒との共有の場面では、生徒の言葉を音楽を形づくっている要素と結びつけながら、生徒の思考力・判断力・表現力を引き出すと共に、新たな音楽的な価値へと転換させていくことができるようになった。また、生徒同士の意見の共有は、自分の思ったことや感じたことなどを伝え、言語活動を通して相手の音楽的な考えのよさに気付き、それに対して評価し合うことが重要である。さらに、音を媒介としたコミュニケーションを円滑に進めていくためには、言葉を用いてお互いの考えを伝え合うことや評価をし合うことなど、言葉によるコミュニケーションも重要だと感じた。そして、その活動は、少しずつ生徒の思考の幅が広がる手だてとなったことを実感した。

## (2) 各教科との関わり ～ 各教科・領域と音楽科研究主題との関連について ～

各教科・領域においてもそれぞれの研究主題と音楽科の研究主題との共通点を探り、互いに活かすことはできないかと検討した結果、音楽科の研究主題である「音によるコミュニケーション活動」に着目

し、それぞれの特性に応じて「コミュニケーション活動」を意図的に取り入れることにした。

自分の考えを全体の前で伝えることが苦手な生徒が多く、本研究を進めるにあたり、まず全体ではなく少人数で学び合うことで、自分では気付けなかったことを発見し学びが深められると考えた。どの学年のどの授業でも少人数を基盤としたコミュニケーション活動に取り組むことにより、話し合いに対する抵抗感が減りスムーズに活動を行うことができことを実感した。少人数の中で話し合うことによって、自信をもって自分の考えを全体の前でも発表することができる生徒が増えてきたことが、学校全体で取り組んできた成果であると考えられる。このことは、「伝える・つなぐ・積み上げる」というキーワードを意識しながら授業に取り組んだ大きな成果といえると思う。

### (3) 研究のまとめと今後の課題

本研究では、生徒一人ひとりが表現したい音のイメージをもったり、美しい音楽を美しいと感じなせ美しいのかを探ったりして音楽表現の力を高めるための活動を重視した。音楽のよさに気付き、そして気付いたこと感じたことを、言葉だけでなく音を媒介として話し合い活動が進められるようになることをめざした結果、少しずつ音楽に対する感性を高めることができたと感じている。

さらに、知覚や感受の場面で、感じたこと、考えたことを言葉によって捉えなおす思考の場と、言葉にして捉えたことを表現したり、友だちに伝えたりする共有の場面を設けることによって、より良い表現につなげることができると考えた。個人的な音楽経験の経験値がプラスされ、積み上げていくことによりその幅が広がることを実感した。それぞれの経験値がアップすることによって、言語によるコミュニケーション活動が深まり、音楽をより深く理解することができるようになったと考えられる。

研究を始めた当初、生徒の思考が知覚することで留まってしまうところに問題を抱えていた。知覚させることは大切だが、それはゴールではなく生徒は知覚する活動により音楽を受け身ではなく能動的に考えられるようになる。その音楽のよさや美しさを感じさせることこそゴールだと考え、知覚したことを次の段階にすすめていくことを大切にして学習を進めていった。一人ひとりの生徒が知覚、感受した音楽の美しさを、授業の中でいっしょに共有していくことこそが、音楽科としての醍醐味ではないかと考えている。

今後は3年間を見通した指導計画を作成し、音によるコミュニケーション活動を深める手段としてさらにどのような指導法が必要なかを考察することが課題である。

## 2-3 道徳の研究について

### 教科化を見据えた「道徳の時間」の研究

～表現することを楽しみすすんで話し合う生徒の育成をめざして～

(川崎市立中原中学校 平成28・29年度)

#### (1) 研究のねらい

文部科学省では、道徳について平成27年度3月に小中学校学習指導要領の一部を改訂、「特別の教科 道徳」として位置付け、中学校では平成31年4月より道徳科として全面実施される。その目的は、年間35時間単位時間が確実に確保されるという量的確保、さらには、子供たちが道徳的価値を理解し、これまで以上に深く考えてその自覚を深めるという質的転換について議論され、「答えがひとつではな

い課題に子供たちが道徳的に向き合い、考え、議論する」道徳教育への転換により児童生徒の道徳性を育むことが求められている。

今までの川崎市の道徳の時間は、『神奈川県道徳 きらめき』をテキストとして使用し、主題構想を中心とした授業法で行っていたが、今後は教科化によって教科書を使用することになる。その際の授業法については、指導すべき内容項目に対応するための適切な資料の選定、ねらいにせまるための指導法の工夫等々課題は山積みである。研究を進めるにあたり、まず道徳の時間に対する苦手意識をなくすことが大切だと考え、1時間ごとの授業を積み上げることを研究の柱として取り組んだ。そのことによって全員が同じベクトルを向いて研究を推進していくことができるようになった。担任は、道徳の時間に自分のクラスの生徒と向き合い語り合ったり、意見を交わしたりすることによって、生徒の内面や普段見せない表情等々に気づくことができる。学校生活の多くの場面で、「話し合うこと」が自然にでき、自分の考えを表現するとともに他者の考えをきくことで、より良く生きようとする生徒を育成したいと願い、それが道徳の授業でも実践できたは、教師としてとても幸せなことであり、そのことは思考力、判断力、表現力の育成と生徒の心をたがやすことにつながったと考える。このことは、特別活動、音楽科さらに道徳の研究と積み上げてきた成果のひとつと考えられる。

## (2) 授業研究の取組

授業力向上のためには、意見をからめながら話し合いを進めることができること、資料の分析の仕方がわかること、どんな発問をすればよいか考えられること、補助発問ができることが重要である。日々の授業を進める中で、そのようなことを意識し、「誰もが道徳の授業ができる」ことを目標として取り組んできた。ここにその一部分を紹介する。

### ①資料の工夫

『私たちの道徳』より《宇宙兄弟》 主題名：強い意志 < 内容項目 A-4>

宇宙兄弟の1コマを扱っていることから、資料の他の場面も利用して授業を進めた。また、教員がグループを作って指導案検討を行い、グループごとに異なった発問を設定したため多様な授業が展開できた。

#### \*グループAの授業展開

- ・発問1「俺の敵はだいたい俺です」の俺とはどういうことでしょうか。
- ・発問2「俺の味方はだいたい.....です」敵を味方に変えたとき、どのような言葉が入ると思いますか。
- ・発問3 どうやって味方を手に入れて、敵をなくすことができるでしょうか。

#### \*グループBの授業展開

- ・発問1 「俺の敵はだいたい.....です」の.....に入る言葉は何だと思えますか。
- ・発問2 この台詞をどんな意味で主人公は言っていると思えますか。
- ・発問3 このような考え方をしている主人公をどう思えますか。
- ・発問4 「俺の味方はだいたい.....です」という台詞にしたとき、.....にどのような言葉を入れますか。

生徒の感想

- ・ 自分は何かあるとすぐやめたりあきらめたりするので、今日出た敵をなくして味方につける方法を試して自分にあった方法で頑張ろうと思った。
- ・ 自分が苦手だということに対し、目標を立ててそれを毎日続けてやっとそれが自分の自信というものになりそれが味方のような存在になると思った。

②発問の工夫

『神奈川県 の道徳 きらめき3』 より<葛藤> 主題名:社会正義<内容項目 C-11>

きらめき3の指導書の発問は主人公を中心に展開していくが、他の登場人物にスポットをあてることで、生徒が話し合いを深められるようにした。

* 指導書の発問	* 実際の発問
・ 発問1 「掲示板に掲示された写真を見て、何がそんなにすごいかわからなかった主人公をどう思いますか。」	→ ・ 発問1 この写真を見てどう思いますか。
・ 発問2 「先に助けるべきだという尾崎さんの意見に同意した主人公をどう思いますか。」	→ ・ 発問2 カーターさんの行動は、人間として正しかったのだろうか。
・ 発問3 「記事を読んでやりきれない気持ちになった主人公をどう思いますか。」	→ ・ 発問3 多くの論争のあと、自殺してしまったカーターさんのことをどう思いますか。 → ・ 発問4 どうして、カーターさんはこんな写真を撮ろうと思ったのでしょうか。

③補助発問の工夫

『文部科学省読み物資料』より<二通の手紙> 主題名:法やきまりを守る<内容項目 C-10>

日頃の生徒の様子から、発言が一つの考え方に偏ると予想された場合には、きちんと補助発問を用意しておき、話し合いが活発になることを意識した。

・ 発問1 「動物園のきまりを守らず、2人の子どもを入園させてしまった元さんをどう思いますか。」	→ 肯定的な意見が多いと予想されたため、批判的な意見を引き出すために、批判的な意見が出た場合には「そうだよね」と教師がその生徒の味方をする。
・ 発問2 「大騒ぎになったのに、母親から手紙をもらい元さんはどう思っているのだろう。」	→ 元さんが喜んでいるという考えが多いことが予想されたため、「果たして元さんは本当嬉しかったのだろうか」という補助発問を用意し深く考えさせた。
・ 発問3 「なぜ元さんは自ら職を辞する決断をしたのだと思いますか。」	→ ねらいにせまる意見がでてこないときのために「元さんがこの年になって初めて考えさせられたことは何だろう」という補助発問を用意しておいた。

### (3) 研究の成果

この研究を通して、一番の成果にあげられるのは、道徳の授業に対して一人ひとりが丁寧に取り組むようになったことであろう。指導案をじっくり時間をかけてグループで検討することを通して、研究授業以外の週1時間の道徳の時間についても、どのような発問すれば話し合いが活発になるのか、ねらいにせまるためにはどのような工夫をすればよいのかを考えながら授業の準備に取り組むようになった。また、授業後に生徒の反応や授業の反省点について、気軽に職員室内で意見交換するようになり、それが自分の授業の改善点として明確になった。また、研究授業を行うことで他の先生の授業を参観することにもなり、他の教師の良い面を吸収したり、自分ならこのように問い返しをするだろうと考えたりするきっかけにもなった。日頃は道徳の時間が金曜日の1時間目に固定されており授業を参観し合う機会が少なかったが、研究を行ったことで視野が広がる結果となった。

## 3 研究の成果と今後の課題

### (1) 研究のまとめ

校長は、学校教育目標の実現を目指し学校経営に努めているが、在職中の9年間の中で職員を同じベクトルの方向に向けることの難しさを痛感したことも事実である。学校の組織の中で足りない部分を把握しその弱いところを補強することはなかなか容易ではない。そのために、教職員一人ひとりの資質や能力を把握し、具体的な手立てを示すことが求められていると考え、様々な研究に取り組んだ。学校経営を推進していく中で、本校の弱みや足りない部分を補うことよりも、強みや得意な部分を伸ばすことが大切であると気付いた。それは、研究を推進していく中で、教職員一人ひとりの変化から感じたことである。

紙面の都合で掲載できなかった研究も数多くあるが、学校経営を通して強く感じたことは、研究に携わることは教職員の力量を確実に高めることになり、日々の授業が変われば生徒の変化は顕著であり、研究を推進する度にそのことを実感し、校長のリーダーシップの大切さを痛感したものである。校長の取組姿勢としては、指示・命令よりも任せること、教えるよりも支援すること、話すよりも聞くことを大切にしたい。

### (2) 学校経営計画との関連

学校の教育理念や果たすべき役割を描いたグランドデザインは、学校経営の設計図としての役割を果たしている。校長は、学校経営の基本的な考え方をできるだけ平易なことばでわかりやすく教職員はもちろん保護者や生徒に伝える努力を怠ってはならない。

研究を積み上げていくことは、教師の意識改革と授業力の向上につながり、そのことは生徒が敏感に感じ取り学校が変わることを実感できる。教師の最も大切な仕事は授業であることをしっかりと伝え実践することが、校長のリーダーシップであると考えている。



参考文献

『クラスで使える応用行動分析』 加藤哲史 (2011)

『月間実践障害児教育』 5~7月号、9月・11月号 学研ホールディングス

『通常学級の授業ユニバーサルデザイン』 全日本特別支援研究教育連盟編 (2010) 日本文化科学社

『中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 総則編』 文部科学省